

人間関係の構築と基礎学力の定着について

不登校生徒の状況

対象生徒は、入学当初は登校することができていたが、中学校 1 年生の 2 学期から欠席が目立つようになり、11 月からは欠席が続いた。中学校には親しい友人はいない。他者の視線を過剰に意識してしまうため、集団の活動は疲れてしまう傾向がみられる。

具体的な取組

○学習内容の自己決定

当該生徒が学習に取り組みやすいように、学習する教科を当該生徒と相談して決めるようにし、個別指導を行った。小学校の学習内容から学び直しを行うこともあった。また、数学や英語は毎時間必ず基礎的内容（百ます計算・アルファベットの確認など）を振り返る時間を設定した。

○個別相談の時間

当該生徒は、教員や自分の親にもなかなか話せない悩みを抱えていた。そのため、支援員による個別相談の時間を学習前に設けた。そこで得た情報を、学年の教員・不登校加配教員・養護教諭・SC と共有し、悩みを解決する協力体制を構築した。



○学級復帰に向けた取組

通常の学級復帰後の学校生活を見据えて、校内別室だけでなく図書室や PC 室など校内の様々な場所で学習活動を行った。このことに事前に理解しておくことで、通常の学級復帰のプレッシャーの軽減につながった。

○行事への参加

学校行事・学年行事（運動会・音楽鑑賞教室・職業体験など）の事前課題の指導を行い、行事への参加を支援した。また、生徒会選挙の体育館での立会演説会・教室での投票をオンラインで参加、教室と同じように校内別室で投票を行った（選挙管理委員会に投票箱を持ってきてもらう）。

成果

中学校 2 年生の 5 月から校内別室を開始してほぼ毎日登校することができている。以前は母親と登校していたが、9 月からは一人で登校できるようになった。7 月からは土曜公開授業や総合の時間は通常学級で過ごすことができるようになってきている。

課題

更なる学習支援体制の充実を図り自信をもてるようにして、各教科の授業も通常の学級で参加できるように支援していく。

「校内別室の取組」について

不登校生徒の状況

別室を利用する生徒は、登校自体に不安が大きい生徒、学校に来ることはできるが教室に入ることができない生徒、行事への参加はできるが授業への参加意欲が低い生徒、生活リズムが不安定な生徒など状況は様々である。

具体的な取組

○校内別室の設置

支援員 1 人が対応している。別室は、普通教室から離れた場所に配置し、椅子とテーブルの学習コーナー 3 つと、畳の休憩コーナーがある。また、可動式のパーティションで、必要に応じて生徒の周りを囲うことができるようにしている。



○別室での活動

生徒は自分の決めた曜日・時間に登校し、自分で学習の目標を決めて自主的な学習を行う。その日の学習目標と振り返りを個人ファイルに記入し、下校前に職員室の学年教員にファイルを手渡す。



○支援員の関わり

「よく来たね」、「会えてうれしい」、「がんばっているね」など生徒を励ます声かけを行う。学習プリント等の用意や自主的な学習のサポートをする。生徒の話し相手、気持ちの聞き取り、教室復帰や行事参加への促しなど生徒の気持ちに寄り添いながら支援する。

○不登校生徒の情報共有

週 1 回、不登校対策委員会にて生徒の状況や支援方法について共通理解を図っている。また、生徒の別室への登下校の時刻、活動内容、様子などを支援員が日報に記録し、担任、学年主任、管理職などで回覧することで、個々の生徒の状況を適時把握できるようにしている。

成果

別室を、教室に入れない生徒の居場所にすることができた。登校することで、様々な教職員と関わる機会となり、他の不登校生徒とのコミュニケーションの場にもなった。教室と同じ課題や小テストを別室で行うなど学習習慣の形成に役立った。

課題

復帰への足掛かりとして、行事への部分参加やリモートでの授業見学など様々な方法を試行すること。

居心地のよい居場所づくりについて

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 1 年生の時に不登校になった。1 学期は通常どおりに登校していたが、2 学期にコロナウイルスに感染し、1 週間ほど欠席したことがきっかけとなる。保護者は協力的で、学校に行かせたい気持ちがあった。

具体的な取組

○個別学習の時間・内容設定

一日の中で 15 分は学習時間とし、個人で取り組む時間を設けている。利用する生徒が自身で持参した教材や、美術の作品作りなどを選択して個別の学習を行っている。学習指導については、別室利用の生徒の質問を基に指導を行ったり、オンラインで動画で学んだり、授業のワークシートなどを活用したりした。

○ＳＣとの連携

カウンセリングを受けたことがない生徒については、ＳＣが別室に行き、関係を作ってからＳＣ面談につないだ。別室教室で生じた人間関係の課題について、ＳＣのカウンセリングを通して自分の課題や人との関わり方に向き合う生徒もいた。

○教員と支援員の連携

別室教室に電話を置き、職員室に連絡をしやすい環境にした。また、職員室内にあるホワイトボードに別室教室利用生徒の登下校の時間を記入し、職員室内の教員と連携を取る機会を設けた。生徒の一日の様子や活動内容を書くシートを作成し、コーディネータと管理職が毎日確認し、連携を取った。

○コミュニケーション活動

不登校巡回教員の出勤日のみ英会話やパズル、卓球、進路のための作文指導を行った。他者と関わることが苦手な生徒が多いため、不登校巡回教員や学年の教員が対応することを校内委員会で話し合い、活動を始めた。



成果

個別学習指導では自分で目標を決めて、自分のペースで学習を進めることができた。コミュニケーション活動ではパズルの作成を通して、生徒同士の連帯感を強め、人間関係を構築することができた。

課題

別室利用のルールが確立していない点があったことで、秩序が守られない場面が何回かあった。ルールづくりを丁寧に行い、生徒、保護者、教員間で共通理解を図ることを徹底していく。

校内別室の活用促進について

不登校生徒の状況

「人間関係のつまずき」、「対人関係の不安」など人間関係の構築が難しく、コミュニケーションが苦手な生徒は、徐々に欠席が増えて不登校となる傾向がある。さらに、不登校の継続により学習の遅れが蓄積された結果、不登校が継続、長期化するなど、出現率が高い状況である。

具体的な取組

○同世代の仲間と関わり

当該生徒はコミュニケーションに苦手意識があり、小学校から不登校が継続していた。中学校3年生になり、支援員や担任、通室する同級生と一緒に勉強や面接練習をする中で、同世代の仲間と関わりたいという意欲が向上した。現在も教室復帰を目指して、校内別室に継続して登校している。

○教育支援センターとの連携

当該生徒は他者の言動に過敏になってしまうことから不登校が継続していたが、積極的に人と関わりたいという気持ちは強く、教育支援センターと校内別室を併用している。行事を中心に授業にも参加できるようになるなど、目標を見付けて、積極的に人と関わり、前向きな言動が増えてきている。

○レジンのキーホルダー作り

当該生徒の発案で、「レジンのキーホルダー作り」に取り組んだ。生徒が好きな色や模様を選んで制作し、学級の生徒にプレゼントをした。目的をもって意欲的に取り組み、他の生徒とのコミュニケーションのきっかけにもなっている。今後も、生徒発案の企画により、継続的な登校への意欲向上につなげていきたい。

○農作業等の体験活動

当該生徒は複数の支援員と関わりをもつことで、多様な価値に気付くことができるようになった。

また、農作業等の体験活動に参加することで、当該生徒の自己肯定感や自尊感情を高めることができた。



成果

校内別室に定期的に通室する生徒が増え、学校や学年の行事への参加につながる事例があった。

保護者や生徒の別室の認知が進み、教育支援センターや特別支援教室等との連携が促進した。

課題

不登校の要因がより多様化しているため、これまで以上に家庭との連携を強化して適切な学びの場や医療機関への円滑な接続を図る必要がある。

校内別室指導支援員を活用した支援体制について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校入学時には通常どおり登校していたが、1学期の後半から欠席が多くなった。3学期からは不登校の状況となり、授業には参加できないものの、学校行事であるスキー移動教室に参加することができた。三者面談により、クラスや集団になじむことが難しいと感じ、コミュニケーションの取り方を苦手としていることが確認できた。

具体的な取組

○入室までの流れ

校内委員会で専門家チームと検討し担任や保健相談部担当が当該生徒、保護者へ利用説明の面談を行った。

不登校から教室復帰を目的とした校内別室では、登校時間や個別学習時間の設定を自ら調整した。学習内容を生徒自身が考えるようにし、個別の学習支援を行った。

○校内での情報の共有

支援員がその日に利用した当該生徒の活動内容や学習状況を記録し、学校全体で情報共有を行っている。支援員との何気ない会話や生徒同士のやりとりの記録から生徒理解へつなげている。担任以外にも教科担当や学年教員が生徒の様子を知ることができた。

○別室での過ごし方

登校したら職員室へ挨拶し、自分で入室カードの「今日の学習予定」を記入し自身が準備したワークシートや教材を進める。また、校内で行われる行事などは支援員と参観する機会を設け教室復帰へのきっかけとしている。現在も校外学習へ向けた総合的な学習の取組に参加している。

○入室カードの活用

別室登校の際、入室カードを受け取り、退出後担任へ渡す。カードの内容は、全教員で共有し、生徒理解につなげる。



成果

学級以外にも居場所があることにより、生徒が安心して登校できるようになった。また、校内別室に継続して登校できるようになり、行事への参加や部分的な教室復帰へつながった。

課題

当該生徒はコミュニケーションを課題としている。小集団でのソーシャルなどを今後実施できるように環境を整える。

不登校生徒支援について

不登校生徒の状況

中学校 1 年生の 11 月頃から人間関係で悩み始めた。インターネット等で事例や自分のことについて検索する中で不安が募っていき、遅刻・早退が増加し、欠席が目立つようになった。保護者は当該生徒を心配して、病院で認知行動療法を受けるようになった。

具体的な取組

○学習活動

「別室指導」は、9 時頃に登校して学習等を行う。生徒が持参した教材に取り組む様子を見守るとともに、質問等がある場合には適宜教員に声をかけている。

○コミュニケーション活動

コミュニケーション能力の育成のため人間関係づくりを目的に数名でパズル・トランプ等を行う。(集団行動でコミュニケーションを図っている)

○日本語会話

外国籍生徒(授業によって教室に参加しづらい申し出あり)に対して、週 3 回、3 時間程度、生徒のペースに合わせた日本語会話と、学習の見守りを行っている。

○在室記録

「在室記録(各個人ごと)」を作成して、週末に学級担任、「不登校対応委員会」と情報共有を行っている。



成果

5、6 人の生徒が集団行動でコミュニケーションが図れるようになってきている。校内別室が生徒にとって「安心した居場所」となっている。

課題

複数教室の用意が必要、時間で分けする等の工夫など学習したい生徒とコミュニケーション活動をしたい生徒との両立を図ること

不登校児童の登校支援について

不登校児童の状況

対象児童は、登校状況が保護者の状態によって左右されることが多く、登校せずに自宅にいるときは、ゲームをして過ごすことが多い。放課後遊びを中心に、友達とのトラブルが発生することが見受けられる。当該児童の気持ちが不安定な時は、保健室や支援室で過ごすことがある。

具体的な取組

○保護者との連携

当該児童が登校できていないときは保護者へ電話連絡したのち、訪問をしている。保護者が当該児童との関わりの中での悩みや相談に応じながら登校を促している。

その日の状況によって、登校につながる日もあれば、身支度が整わずに欠席となる場合も少なくない。

○関係機関との連携

保護者の困り感に寄り添って、当該児童についての相談機関の紹介を行っている。ＳＣ、子ども相談室、連携を前提として、医療機関を勧めている。

保護者の状況によっては、民生委員や市役所の福祉課等との連携も視野に入れて対応していく。

○校内別室での活動内容

担任教諭・養護教諭と連携し、当該児童が学校で取り組みそうなことを模索し提案して、安心して学校で過ごせるよう働きかけている。

別室では絵を描いたり、ゲームをしたり、他学年の来室者との交流を楽しみながら過ごすことができること、別室が当該児童にとって安心できる居場所であることを提案している。

○校内別室の設置

放送室を整備し、別室指導スペースとして確保した。部屋の名称は登校支援が必要な児童が考案し、看板づくりも行った。



成果

これまで担任が対応していた登校支援であるが、継続的に直接アプローチできる支援員が配置されたことで、当該児童へのよりよい関係性の構築が進んだ。保護者の理解や安心感につながり、学校を信頼するようになった。

課題

保護者の状態が当該児童の登校に影響する場合は、関係機関との連携が必要である。

校内別室について

不登校児童の状況

対象児童は、小学校 4 年生で、1 年生の時から登校しぶりの様子が見られ、保護者と一緒に登校しても保護者と離れられず、教室に入ることができなかった。その後、徐々に登校時間も遅くなり、教室にどうしても行けない時は校内別室にてオンラインでの学習に取り組んでいる。

具体的な取組

○ＳＣとの連携

担任と連携を図り、保護者に登校時間を早めることをお願いすると共に、ＳＣとの面談を勧めた。

当該児童は、ＳＣと週 1 回 1 時間話す機会をつくり、心の安定につながっている。

○オンライン学習

多くの教科をオンライン学習で進めている。算数が得意なので、他の児童と同じ進度で進めているが、話し合い活動や調べ学習の取組は難しいので、支援員が学習の支援をしている。また、音楽室、図工室、外国語室、体育の場所には参加するよう声かけをしている。

○休み時間の過ごし方

他学年の児童と一緒に校内別室で過ごす時間が長いので、休み時間には他の児童とゲームやボール投げ等で交流し、コミュニケーションを図っている。

また、給食は校内別室で支援員と食べていて、教室で食べることも勧めている。

○黒板を活用した予定の可視化

校内別室では、今日の予定を可視化したり、心の中を表現する方法の一つとして黒板に好きな絵を描いたりしている。



成果

音楽室、図工室、外国語室、体育の場所には行くことができるようになった。

支援員とコミュニケーションを図る中で、表情が柔らかくなり自分から話をするようになった。

課題

教室に入りづらい教科もあるので、担任と連携を強化していく。

校内別室について



不登校児童の状況

対象児童は、学期途中から登校渋りが始まった。理由は不明である。家庭では変わりなく過ごしている。保護者は「甘えではないか」という思いがありつつも、無理に連れてくることはしていない。

「校内別室に給食を食べにおいで」という学校の声かけから短時間の登校が再開した。

具体的な取組

○環境整備

日当たりのよい静かな教室を使用し、座卓・椅子など複数のスペースを用意した。

カードゲーム、絵本、色鉛筆等の遊び道具を用意した。

利用児童が作製した工作作品や絵を示して和やかな雰囲気の中過ごせるように工夫している。

○児童の意思を尊重

別室登校後、その日の活動を自分で決め、時間割に書くようにして、支援員が手伝うこともあった。

学年を遡って学習に取り組むことができるように、各種の教材を用意した。

タブレット使用時は時間を決め、支援員が時間の管理をした。

○個別スペースの確保

集中して学習したい時や、一人になりたい時には、全体スペースの他に個別スペースも用意してある。

パーティションで区切ってあるので柔軟な使用が可能である。



○家庭・校内の連携

その日の活動や様子を連絡カードに書き、別室利用の児童経由で保護者に書き、別室利用の児童経由で保護者に



渡している。学校保管用に記録も残し、担任・管理職との情報共有に役立てている。

成果

校内別室で給食から、自習できるようになり、クラスの特定の教科に参加できるようになった。さらに、複数の教科の参加になり、給食や朝の会に教室で参加することもできるようになった。ほぼ毎日登校できるようになり、集団に関わる時間が増加した。

課題

複数の児童が別室を利用することがあるため、校内体制の整備が必要である。

校内別室を活用した支援について

不登校児童の状況

対象児童は、小学校 3 年のときに転入してきた児童であり、前籍校でも登校しぶりの傾向があった。3 年生の途中から教室へ入れなくなり別室登校をするようになった。集団の中で生活や活動をすることへの不安感は強いが、学習には意欲的である。

具体的な取組

○タブレット型端末の活用

在籍学級から配信されたオンライン授業に校内別室から参加した。友達同士で話し合う場面では、支援員と話し合いを行い、話し合いを通して考えたことをコメント機能で発言して、在籍学級の学習に参加した。



○担任との情報共有

登校した日には、個人ファイルに一日の振り返りと児童の様子を記入し、支援員と担任が情報共有、指導の方向性の確認を行っている。

また、特別支援教室専門員や S C とも連携し、情報共有や課題解決に向けた方策を検討している。

○個別の学習支援

学校に登校していない日の学習内容が分からないままにならないように、教室で使ったプリントを中心に支援員が個別指導を行った。

また、体育や音楽などの参加が難しい授業では、支援員と安心できる場所から見学を行った。その際、授業に関係のある話をし、学習に関心をもたせた。

○在籍学級との交流

友達が校内別室に遊びに来たら受け入れて、時には支援員も間に入り友達との交流を支援した。当該児童に余裕がなさそうな時は、支援員が事前に担任や友達にその旨を伝え、負担にならないように配慮した。

担任と連携し、当該児童が得意としている折り紙で作った作品を、在籍学級の友達にあげる機会を設けるなどした。

成果

年度当初、コミュニケーションを図ることが難しく、「うん」「ううん」や首振りしか反応がなかったが、分からないことや不安に思っていることなど意思表示ができるようになった。また、当該児童が一人で教室に給食を取りに行けるようになった。

課題

校内別室での学習が教室での学習に生かせるようにすることが課題である。

「居場所になる」別室利用での支援について

不登校児童の状況

対象児童は、小学校 5 年生である。2 年生から登校しづりが始まり、3 年生から不登校になっている。不登校の要因ははっきりしていない。医療機関からは、ADHD と ASD 傾向があると言われている。校内別室指導支援員を配置してから、別室登校を始めている。

具体的な取組

○校内別室の整備

教室以外に安心して過ごせる居場所をつくるために校内別室を設置した。個別に安心して学習できるよう教室のレイアウトを工夫する等の環境整備を行った。



○個別学習の時間と環境の設定

担任からの課題、または自宅から持参した課題に取り組み、分からないところは支援員が支援している。

日誌等を使い、その日行った学習や活動について、支援員と担任とで共通理解を行い、今後の指導に生かしている。

○コミュニケーション力の向上に向けた支援

別室に来ている児童同士がコミュニケーションを図れるよう、カードゲームなどを行ったり、一緒に絵を描く活動を企画したりしている。

○別室でのクラブ活動

当該児童が所属しているクラブ担当の先生と相談し、できる活動を工夫して行っている。

成果

昨年度は、限られた時間のみの登校だったが、今年度は学校で過ごす時間が増え、生活のリズムが整った。別室に来ている児童同士で会話をする姿が見られるようになり、同年代の子とコミュニケーションを取る機会が増え、笑顔も見られるようになった。

課題

居場所である別室への登校日数を増やし、同年代との関わりをより増やして、教室へ復帰できるようにすることが課題である。

安心感を高めて、教室との柔軟な往来を実現する別室支援について

不登校児童の状況

対象児童は、前年度の1学期中盤から登校しぶりが始まり、3学期途中からほとんど登校できない状況になった。支援を必要とする特性があることや、集団不適応といった様子があり、登校への意欲が高まらなかった。登校を促す当該児童に対し、保護者もなかなか登校を促すことができなかった。

具体的な取組

○校内別室の利用

校内別室の存在と目的を保護者に伝え、対象児童や家庭のニーズに合わせて活用していけることを説明した。保護者の理解があり、すぐに手続きを進めて校内別室の利用を開始した。

○安心できる環境の整備

パーティションで区切られたスペースや集まって活動できるスペースを作り、気持ちや状態に合わせて居場所を選べる空間を整備した。



○負担感の少ない課題の設定

担任と校内別室指導支援員とで連携を深め、相談して別室で行う課題を選定した。

課題を進めるペースや時間は、当該児童と校内別室指導支援員とで話し合って決定し、当該児童にとって負担感の少ない進め方をした。

○教室や担任との連携

学年行事や特別な授業など、場面をしばって教室での学習にも参加できるようにした。

校内別室指導支援員が日々の学習活動について記録したファイルを作成し、毎日担任からもコメントを入れて家庭と連携するようにした。

成果

4、5月までは欠席が続いていたが、別室を利用することになってからは毎日登校することができるようになった。

学級や学年の行事にも参加できるようになり、遠足や生活科見学にも参加することができた。

課題

利用を希望する児童が多くなり、その特性も様々であることから、個に応じた対応をしていける環境を整備する。

「つながり」を大切にした取組について

不登校児童の状況

対象児童は、昨年度の初旬頃から不登校傾向にあり、昨年度の2学期はほぼ登校できていない。3学期に別室での登校がややできるようになっていた。今年度からは、校内適応支援員と共に別室での学習を進めており、現在は毎日登校できている。学習内容によっては、教室での授業に参加している。

具体的な取組

○一日の予定表

1時間目～6時間目まで、どのような学習に取り組むか、どの授業ならクラスに入れるかを、当該児童自ら考え、一日の予定表を作成している。「昨日の振り返り」、「今日のめあて」、「今日一日の振り返り」ができる様式になっており、毎日朝の時間に作成している。

○オンライン授業の活用

当該児童の学級担任、保護者と連携して、当該児童がオンライン授業であれば参加できるという場合は、校内別室や自宅から参加できるようにしている。



○クラスとのつながり

休み時間、給食の時間、朝の会、帰りの会など、授業時間以外の時間で教室に入れる時間があれば、教室に行くよう促している。クラスの友達に別室へ誘いに来てもらおうと教室に行けることもある。



○欠席連絡カード

欠席が続いたときは、クラスの友達に、「1日の授業内容」、「当該児童へのメッセージ」等をまとめた「欠席連絡カード」を作成している。できたものを当該児童の自宅に届け、学校に来るきっかけにしている。



成果

教室にいることが苦しく、廊下で休むことが多かった児童や、登校自体が難しく、自宅で過ごしていた児童が、別室に登校し、落ち着いて学習に取り組む時間を確保できるようになった。

課題

別室のルールを明確にして、必要な児童が利用できるように体制を整備する。

「自分らしさを発揮する」校内別室の取組について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 3 年生であり、明朗な性格で友人も多く活動的だが、学校生活に漠然とした不安がある。入学当初は運動部に入るなど意欲を見せたものの、数週間で不登校になった。2 年生 10 月から始めた別室登校支援が功を奏し、「週 2 日 1 時間→週 3 日午前中→毎日午前中」と在室時間が増え、通学のリズムが整った。

具体的な取組

○より「快適な」居場所の提供

教室レイアウトは、当該生徒自身の理想を取り入れて、実際に机を動かし試行錯誤しながら決定した。また、不要となった段ボール箱を使い、教室の備品を自作した。ボール紙製のパーティションや落書きコーナーができあがり、教室を自分たちらしく演出している。

○校内・専門機関との連携

担任と教育相談部、SC、支援員間で情報を共有し、多角的に対応する。不登校対応巡回指導教員の来校日（週 1 日）には小集団でのレクリエーション時間を設けた。興味のある分野を自由に調べてみんなの前でプレゼンする試みが好評で、知的好奇心の育成に役立っている。

○個別学習の設定及び対応

学習への取組は、当該生徒の自主性に任せている。自身で適切な教材を考え、用意する。意欲が高まらないときは「T O D O リスト」を使い、当該生徒にできる範囲で計画を立てるようにして、実行できるようにしている。



○行事参加へのサポート

どの授業・活動なら抵抗感が少ないかを当該生徒と相談し、仮の時間割を作成する。「最後方の席で」、「1 授業だけ」、「午後から」など、スモールステップでの参加を進める。儀式行事は、例えば「始業式ツアー」などのように独自のイベントに置き換えて別室利用の生徒から募集した。

成果

3 年生になったのを機に在籍学級に 2 か月間の短期復帰を果たし、5 月の運動会にも参加した。6 月以降は別室登校に戻ったが、不登校状態からは完全に脱している。毎日（週 5 日）を校内別室で過ごせるようになり、チャレンジスクールの受検にも意欲を見せている。

課題

支援員 1 人が教室を運営する。支援員が休んだ場合の体制などを検討する。